

アムールトラの同居

飼育展示担当 主席主査 宇佐美 均

大森山動物園では2005年3月から希少動物であるアムールトラの飼育展示を行い、2008年3月には2頭の繁殖に成功しています。再び同種の繁殖を目指すため、2011年10月にオスのヒロシ（7歳）、2016年3月にメスのカサンドラ（4歳）を導入し、新たなペアとして現在にいたっています。

本来、野生でのアムールトラは単独で行動し、広い縄張りを持ち生活する動物です。動物園等の限られたスペースで他の個体と同居する場合、環境へ慣らすことや他の個体を認識させるための見合い等、十分に時間をかけ様子を観察する必要があります。そのため、メスの導入以降、お見合いや発情兆候の見極め等、行動の変化を中心に観察し同居に向けた様々な準備を進めてきました。

2017年12月、ようやく環境が整い屋外展示場で同居を行うこととなりました。

2頭の安全確保を最優先とし、観察体制や闘争が発生した場合の対応策等、役割分担や対応手法を何度も確認し12月5日に同居を開始しました。

初日は、十分な見合いの期間をとっていたこともあり、お互い敵意を表すような警戒行動もなく、メスが積極的にオスへ体をすり寄せたり、腹ばいになり交尾を促すような行動が数回観察されました。その行動に対しオスは

時々交尾姿勢を見せるものの、確実なものではありませんでしたが、良好な関係が確認できました。

アムールトラの発情期間は、約1週間から10日間続きます。ピークは発情の始まりから3日～5日頃とされていることから、その習性どおり日増しに交尾行動の回数も増え、妊娠の可能性が期待されました。しかし、1月になり再びメスの発情兆候が確認されたため、残念ながら12月の同居での妊娠はありませんでした。

2018年1月、2度目の同居を行っています。相性が良好なことから、今後も十分な観察を行い希少種の繁殖に向けた取り組みを継続していきたいと思っております。



カサンドラ(下)とヒロシ



カサンドラ(左)とヒロシ

鳥インフルエンザ対策について

飼育展示担当 副参事 三浦 匡哉

2016年の11月に大森山動物園で発生した高病原性鳥インフルエンザ。動物病院という閉鎖された場所で発生したことや感染源が特定できなかったことから、どのような対策を取るか手探りの状態でスタートしました。

動物病院内で発生した場合、病院が機能不全になることを防ぐため、冬季間病院の入院棟に鳥を入れないことにしました。しかし、調子を崩した鳥や感染の疑いがある鳥をそのままにしておく、同居している鳥や周辺の鳥に影響が及ぶ危険性があるため、鳥類専用の隔離施設を作ることにしました。(写真1)

昨年の経験から、鳥を個別に管理すればその建物の中でインフルエンザを封じ込められることが分かったので、大型鳥類用の部屋を2つ、小型から中型の鳥を入れる部屋を2つ準備し、いざ発生したときのために防護服の着替えや感染性廃棄物を保管するための前室を各部屋に設けました。飼育室と前室の壁、天井、床は高压洗浄機で消毒できるような材質にしました。(写真2)

隔離施設を病院の隣に建てることに伴い、ニホンイヌワシの繁殖棟の行き先が問題になりました。当園ではニホンイヌワシの繁殖に力を入れてきたので、なくてはならない施設です。広く見える動物園でも建設に適した場所というのはなかなか見つかりませんが、最終的にサル山の裏に建てることになりました。(写真3)

飼育している鳥を鳥インフルエンザから守るためにはどうしたらいいか？ ウイルスをネズミなどの小動

物や昆虫が運ぶことがあり、とても厳重に管理している養鶏場でさえ発生が見られることから、ウイルスを100%防ぐことは不可能です。

そこで、ポイントを絞って考えました。ガンやカモ等の水鳥がウイルスを運ぶことが知られており、死体をあさるカラスも感染源となる可能性があります。これらの野鳥から遠ざけるため、建物に入れられる鳥は建物に収容することにしました。クジャクを収容する新しい建物を作ったり(写真4)、使っていなかった建物をニホンコウノトリの越冬舎にしたり、エミューやトキ類でも改良しました。

次に、建物内に収容できないところは水鳥とカラスが展示場に入らないようにネットを取り付けました。ニホンイヌワシやフクロウがスズメ等の野鳥を捕まえることはありませんが、念には念を入れ、猛禽舎等はさらに細かい網目にしました。

ネットの取り付けには課題がありました。雪がネットに積もると雪の重みでネットが壊れてしまうことと、網目によって見づらくなることです。そこで、網の素材を選んだり、鳥インフルエンザのシーズン以外は取り外しができるようにいろいろな工夫を施しました。(写真5) 様々な業者さんに頑張っていただき、何とか年内にすべての工事を終えることができました。

鳥インフルエンザは目に見えるハード面だけでは防ぐことはできません。常日頃から危機意識を持ち、飼育員の長靴の洗浄消毒の徹底などソフト面の対応も非常に重要です。最後に、大森山動物園の希少な鳥類

を守るため、これからも鳥インフルエンザ対策には万全を期して臨んでいきます。



写真1 隔離棟



写真2 隔離棟内部(感染個体ではありません)



写真3 イヌワシ繁殖棟



写真4 クジャク舎



写真5 ネットを張ったペンギン舎